1

岩国市芦山家に所蔵される「婦人臓図」
――東京大学本，千葉大学本との比較――

片岡　勝子
高陽ニュータウン病院

明和8年12月（1772年1月）に京都で山脇東門（橘玄陶）によって女性刑死体の観臓が行われ，菅原誠意が2日間かけて描いた『玉砕臓図』は東京大学に（東京大学本），同様の『婦人臓図』は千葉大学に所蔵されている（千葉大学本）．さらに題箋がないものの同様の図は岩国市芦山家にも伝えられている（芦山家本）．今回は芦山家本と前2本の比較検討を試みる．

跋文の筆者（日付）をみると，東京大学本では橘陶（安永3年蝋月，1775年1月），千葉大学本では皆川愿題（淇園，安永3年蝋月朔）の「東門と親交のあった中嶋孫信が菅原誠意に副本として描かせた」という文に続いて橘陶の跋（安永3年蝋月）がある．芦山家本では橘陶の跋を写した後に橘之豹による「應坂本生需」（寛政4年4月，1792年5月）の1行がある．しかし，図を比較検討すると，3本が描かれた順序は，この日付どおりではないと考えられる．

3本ともに基本的には同じ図で構成され，芦山家本で図の順序が違うのは後世の表装の際の間違いと考えられる．3本間での若干の相違について次に述べる．芦山家本では肺表面の描写に難渋した跡が明瞭であるのに対し，千葉大学本と東京大学本では様式化されて描かれ，後者でそれは著しい．胃漿膜面の血管は，芦山家本では薄墨と微妙にずれた赤線で描かれ，分枝は自然である．東京大学本では太い血管は赤の2本線，細い血管は1本線である．千葉大学本では赤1本線で描かれており，分枝がぎくしゃくした感じがする．脳硬膜上面の図をみると，芦山家本と千葉大学本では正中線が引かれているが，東京大学本では引かれていない．硬膜の血管は芦山家本では頭蓋骨と硬膜の間から出ており，胃と同様に薄墨と赤線で描かれる．東京大学本では赤線で描かれた血管は皮膚と頭蓋骨の間から出て骨の断面を横断して硬膜に達している．千葉大学本では頭蓋骨と硬膜の間から出て硬膜に分布しているが，分枝がぎくしゃくした印象がある．

一連の体幹の骨の図は，3本ともに浮遊肋がなく，肋骨付着部より下で仙骨に至る椎骨の数が多すぎ，骨盤の形も奇妙である．2日間の観臓で骨格標本まで制作し描画することは困難であり，人骨を描写したのかどうかも疑わしい．すでに根来東叔の『人身連骨真形図』（1741年）には，胸椎12，肋骨12対，腰椎5が描かれているのである．下位腰椎，仙骨，尾骨を一塊とした図（「八膠」）は，極めて詳細に写実的に描かれており，観臓から跋文まで3年間あることから，骨を晒す時間は十分あったと考えられるが，別人の骨を描いた可能性もある．いずれにしても画室で十分な時間をかけて晒骨を丹念に写生したものであろう．3本の八膠図を比較すると，もっとも詳細で立体感やリアリティに富んでいるのは芦山家本で，千葉大学本，東京大学本の順になっている．なお，芦山家本には描写中に筆から滴ったと考えられる画紙の汚れが全体的にあり，他の2本は極めてきれいである．

以上のことから，芦山家本を原本とすれば東京大学本，千葉大学本とも描くことができるが，東京大学本を元に千葉大学本を描くことはできないと考えられる．すなわち，3本ともに山脇東門の下で菅原誠意（その一門を含む可能性は否定できない）が描いたもので，観臓の場で描かれたのは芦山家本であり，他の2本は画室でそれを浄書したものと推察される．

なお，芦山家本の末尾に見える坂本生とは，吉川藩で藩医（お匙，御番医）を代々勤め，京都の山脇門に遊学している坂本家の5代喜庵（1755–1818）と考えられる．芦山家代々も岩国の医家で，坂本家とは養子縁組もしている関係から，「婦人臓図」は坂本家から芦山家に渡ったと思われる．